

鉄の街のロビンソン

富盛菊枝作

鈴木琢磨画



少年 長編創作選 5
少女
鉄の街のロビンソン



■著者 ^{とみ もり きく え} 富 盛 菊 枝

■発行者 岡 本 陸 人

■印刷 新興印刷製本株式会社
錦明印刷株式会社(オフセット)

■製本 中村製本株式会社

■発行所 株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田 3-2-1 〒101

電話 東京 (263) 0 6 4 1 〈代〉

1971年12月10日発行

NDC 913

8393-16305-0027

富盛菊枝

鉄の街のロビンソン

あかね書房 1971

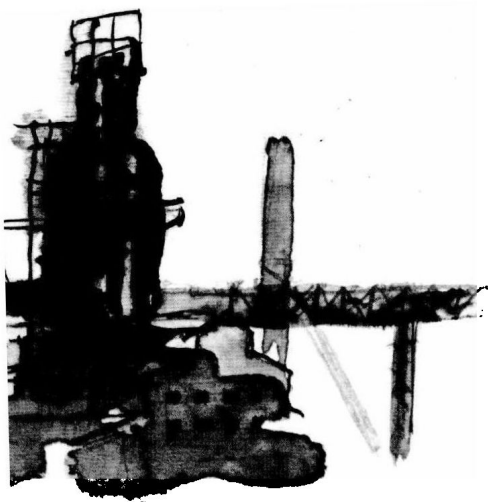
287p 21cm (少年少女長編創作選 5)



鉄の街のロビンソン

富盛菊枝作 鈴木琢磨画

少年
少女 長編創作選 5 あかね書房



目次

- 1 朝、六は家をとびだす……………8
- 2 てのひらで名案が生まれる……………20
- 3 準備はひとりでするしかない……………36
じゅんび
- 4 とうふ売りがはじまつた……………56
- 5 半島のふしぎな住人たち……………75
- 6 おとくい地図はひろがる……………90
- 7 祭りの夜のつぶやき……………114
- 8 仲間のひとりはだれにする……………127
なかま



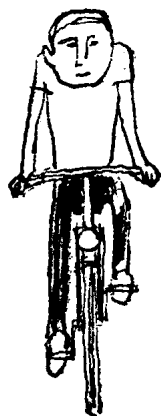
- 9 真夜中にむかしを掘る……140
- 10 ウタリの酒場で……159
- 11 町が燃えるぞ……180
- 12 信じるか信じないか……200
- 13 商売繁盛はにらまれる……224
しょうばい はんじょう
- 14 地獄穴の中で……247
じごくあな
- 15 赤い砂と黒い土をかぶる町……275
すな

装幀・挿画／鈴木琢磨





鉄の街のロビンソン
富盛菊枝作 鈴木琢磨画



1 朝、六は家をとびだす

「どこに行くんだい、六。こんな朝っぱらから。」

大がまのむこうで、いきなり声がひびいた。姿は見えないが、おもちゃの機関銃をうちまくるよう
に、ぼんぼんいうのは、おばさんだ。六は、あわててからだを折った。かん高い声といっしょにとんで
きたたまでもさけるようになかった。上がりがまちに低くなった。

教室の三分の一もない、せまいとうふ屋の仕事場では、グラインダー（豆すり機）が豆をかむ音、ガス
の火がしゅうしゅういう音、かまの中で豆乳が煮えたつ音や水そうに落ちこむ水の音が、ぶつかり合っ
ている。だが、おばさんは、どんな物音にも負けない声をはりあげる。

「どうしたっていうのさ。おまえ、ねぼけてんじゃないのっ。」

あとからあとからわきあがる湯煙が、かまの上にはろがり、早い雲になって散るなかで、てぬぐいを
かぶったおばさんの頭が、見えかくれする。六は、そのあたりに目をくばったまま、トレパンをはいた
足で、コンクリートの床をさぐる。ねぼけていない証拠に、つま先は、一メートルほどはなれてぬぎ
すててあった運動ぐつを両方とも、すぐにさがしあてた。右も左もなく足をつつこんで、仕事場のわき
にある裏口へ、五、六歩とんだ。ぐすぐずしぶる引き戸をそと持ちあげて動かし、あいたすきまにか

らだをわりこませてから、はじめて口を開いた。

「ちょっと、そこまで行ってくる。」

声が小さかったのか、とうふ作りにいそがしい仕事場からは、返事がない。

「自転車借りるよ。」

六は、少し大きい声をだした。

「ああ。」

赤金色をしたグライNDERの胴のかけから、おじさんが上半身をのぞかせた。

「きょうは、おれ、朝一番で出る日なんだ。早くもどってこいよ。」

「六時までだよ、六時。」

追っかけて、おばさんがさけぶ。

「わかった。」

六は、戸口の柱に返事をうちつけて、しきいの内側にあった片足をひきぬいた。

「なんだってまた、あのねぼすけが……。」

白い髪にかかる湯気を手ではらいながら、おばばがあらわれた。足もとまであるゴムの前かけをゆすって、ふとったからだを運んでくる。六は、肩をすくめて、自転車のハンドルにとびついた。ななめにたおした車体に全身をあずけて、店の前の通りへすべりだす。

「朝から、なーにがあるっちゅうんだか……たまに早くおきたと思ったら、とびだしていっちまう……ろくてなしの、六があ。」

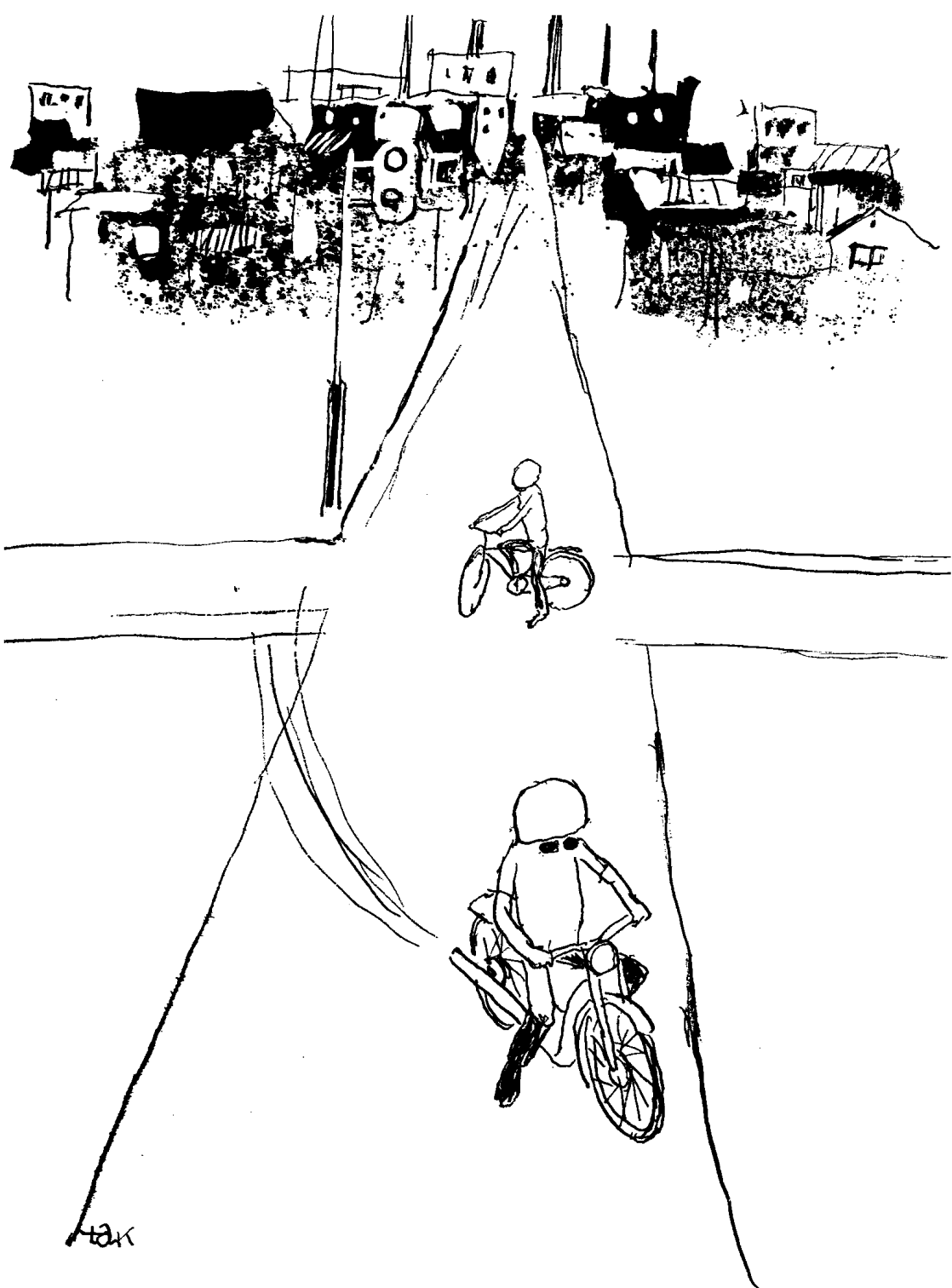
おばばは、六の背中^{せなか}にぶつぶついった。「ろくてなし」のことを、おばばは「ろくてなし」という。「ろくてなしの六」か。ふたりめの孫^{まご}なのに、六なんて名前がいいといってゆずらなかったのは、おばばだっていうからなあ。

六は、広い通りまで出て、ふりむいた。おばばはいま、六があけっ放しにしてきた戸につかまって、血圧^{けつあつ}がきゆうにあがったりしないように、空をあおいでいる。

朝もやの中で、まだねむっている町の通りを、六はぐんぐん走りだした。自転車は、おじさんが製鉄^{せいてつ}工場^{こうじょう}への通勤^{つうきん}に使っている中古だが、調子がいい。競輪^{けいりん}の選手がやるように背中^{せなか}をまるめ、あごをひいて、ぐっと前方をにらむ。舗装道路^{ほさうだうろ}が、しつとりと露^{つゆ}にぬれて続いている。市役所の散水車^{さんすいしゃ}がまちがって朝早く通っていったのではないかと思われるほどだ。タイヤが路面^{ろめん}に吸^すわれて、ひたひたいう。いい音だ。だれもない夜明けの国道をぶっとばしてみたいと考えたのは、ゆうべだけじゃないけど、ぱっと目をさませたのは、けさがはじめてだもんな。

四つ角の信号が見えてきた。黄色い注意信号だけが、少しずつ明るんできた町角でついたり消えたりしている。まるで、ねぼけた目配^{めばい}せのようだ。六は信号から目をはなして、スピードをあげながら、十字路につき進んだ。

左手の道で、猛獣^{もうじゆう}のうなり声がした。黒いバイクが空中をとぶいきおいで追^おってくる。六は、ブレーキをにぎって、強く引いた。とまりきれないでいる自転車を、バイクがしりをひねってかわす。白いヘルメットに色めがねをつけた若い男^{わか}が、ふりむいてさげんだ。そいつは、大きな曲線を描^かいて進路をとりなおすと、つつ立っている六に轟音^{ごうおん}をあびせて、右手の道へまっすぐ消えていく。



あわててとびおりてしまったので、自転車は道のまん中で、足を折られた動物のようにかしいでたおれていた。引きおこしてみると、バックミラーにひびがはいり、ハンドルがななめに曲がっている。前輪を股にはさんで、ハンドルを正面にむけようと、力んだ。おばさんに洗ってもらったばかりの白いトレパンに、土のしみがつく。荒い息をおさえて、自転車にまたがった。バイクが走り去ったタイヤのあとが、道の面にはりついているのが、目にうつった。

こいつをつけてってやろう。すごいスピードでとびだしてきたくせに、あんちくしょうたらこっちをどなりやがった。「やいっ、気をつけろ！」っていったのか、「もたもたするなっ」だったか……。いま投げつけられたことを、ミラーのかけらといっしょに、あいつにつき返してやりたい。

「なにやってんだよ、このバカ！」

そうだ。バイクの男は、そういったんだ。こっちを子どもとみて、せせらわらった声のひびきまで思いつける。六は、自転車の三倍もありそうな太さで目の前にのびているタイヤのあとをふみにじって、走りだした。

国道をそれた道は、まもなく舗装道路ではなくなった。小石と砂のまじった道の表面には前に通った車のあとが何本もついていて、バイクが掘っていった浅いみぞと見分けがつかない。

あたりには、家がなかった。人の姿や車の影もない。砂のまじり具合が多くなってくる道は、海へむかっていて、浜へ出るあたりに漁師たちの家らしい屋根がひとかたまり見える。そして、浜辺に行きつかないうちに、海岸にそって西へ走る分かれ道に出あった。

六は、二本の道のつけ根で自転車をとめた。ふりかえてみると、交差点からせいぜい三百メートル

くらいしかきていない。それなのに、まわりは、丈の長い草のしげる一面の草地で、波の騒ぐ音が近くきこえる。国道の裏側に、こんなところがあるなんて知らなかった。四か月前に北海道の東にある炭鉱町から南部のこの町、蘭内に移ってきたばかりのころ、六は、はじめての土地で、この、わくわくする気持をしょっちゅう味わった。それが、いつのまにか、この町を知りつくしたつもりになっていたのだ。たいていの人間にとって、新しい世界がたちまちあたりまえの世界になってしまふように。

いま、六には、見おぼえのある町並をちらっとのぞかせている十字路のあたりが、なじみの深い世界からの出口だったように見える。あそこへもどるまで、時間はまだあるんだ。六は、自転車をおりてシヤツの胸のボタンがはじけてしまふほど大きなのびをした。

朝焼けに染まりはじめた低い砂山をこえて、海のひびきが大气の中を伝わってくる。砂山のとっぺんに登って、ひろがる水を見てみたい。六は、分かれ道のほうへかけた。ほんの二、三メートル行つたところでのめった。砂地に、一本のすじがのびている。バイクが通ったあとだ。タイヤの波形の模様はたしかめられないが、十センチくらいの溝の幅といい、はげしく砂をかき分けたあとといい、さっきのバイクが作ったものにちがいない。

なんてはつきりした、あしあと、だろう。これをつけていけば、あの男にあえる。六は、自転車のことへもどって、追跡を続けた。

あたりがぎゆうに光であふれた。のぼってきた太陽が、白い矢を、うしろから射かけてくる。車輪が新品に生まれかわったように輝く。バックミラーは、光をはね返した。明るい鏡の一箇所は欠け落ちて、ひびわれがはしまでとどいている。ガラスの内側にはいりこんだ大きな足長グモが、折れ曲がった八本

の足をのばしているように見える。

「ちえっ、買って返さなきゃだめだな、こいつは。」

だが、弁償するんだ？ もちろん、とびだしてきたあの男だ。でも、このバカ！ って、どなったようなやつが、こっちの言い分をきくだろうか。

砂山からはずれ、道が浜とひと続きになったところで、自転車がどうにもならないほど重くなった。バイクの若者がおもしろがって走ったあとを、自転車をつけていくなんて、ほんとにバカみたいなことだ。ほほをふくらませ、まるい顔をいつそうまるく赤くして追っかけている姿を、あの男が見たら、なんというだろう。

ためらう気持とは反対に、手と足はいきおいよく動く。砂地からやわらかい赤土にかわった道の上に、タイヤのあとが、はっきりと浮きだしている。六は、小高い丘の斜面を登りにかかった。バイクなら一気にかけあがってしまっただろうと思えるゆるやかな坂でも、自転車では息がきれる。そうだ、身軽になって足を使うほうがいい。そして、おじさんのだいいじな自転車は、これ以上被害をかぶらないように、草むらにかくしておくことだ。

六は、ススキに似た背の高い草の茂みをかき分けた。細い葉先にたまった朝露が首すじに落ちてくる。両手を大きく動かして目の前の草をはらった。うす暗い茂みの奥に、黒い保護色をぬったような鋼のカタマリが見えた。

バイクだ！ 六は自転車を横抱きにして、あとずさった。それは、いまにも、うなりをあげてとびだしてきそうに、こっちに頭をむけている。六は、茂みを出て、つけてきたタイヤのあとをたどってみた。

たしかに、草むらの前で消えている。あの男は、ここまできて、どういうわけか、六と同じように乗り物をかくす気になったのだ。

六は、あたりに目を走らせた。草地をぬけてきて上へ続いている一本道、道のはずれの黄色い花のむらがり、ところどころに動物がうずくまっているような丘の起伏、どこにも人影はない。

もういちど目をあげたとき、丘の上でなにかがちらっと動いた。一面の緑の中で、そこだけ赤茶色の地肌がめだつ崖のふちだ。そこに黒い影がひとつ、立っている。男だ。さっきの男かどうかははっきりしないが、上から下まで黒っぽい服装は似ている。

男は、二、三步ふみだし、いきなり、長い上着をひるがえして崖をとびおりた。たしかにこっちをめざしてとんだ。あいつだ。バイクの男だ。

崖の下で、男は、あぶなくかたむきかけたからだをたてなおした。頭をつきだし、地面に目を吸いつけられたようにして歩いてくる。六は、こわばる足を、むりに前へ運んだ。もう、にげることもかくれることもできない。そこで、六の足はびたりととまった。全身から力がぬけていった。近づいた男は、肉のついたたくましい肩をしていた青年とはちがって、やせて背が高く、ずっと年をとったからだつきをしている。マントのように見えた上着は、晴れた夏の朝だというのにすっぽり着こんでいる灰色のうすよごれたレインコートだった。

朝日を背負った六の長い影が男の足もとにとどいた。男は、顔をあげた。くせのある毛が耳のうしろではねあがり、とがったほおの下からあごまでのびたひげが長い脈を作っている。黄色いひたいの下の細い、ねむそうな目が、奥のほうで一瞬、鋭く光った。